

生殖医療と家族援助

～LGBTQとアライ～

荒木晃子

援助者であること

前号で、「悩みはつきない」と括った筆者は、長年、心理支援の専門職といわれる心理カウンセリングを生業にしている。カウンセリングは対人援助職のひとつであるが、“人のところをどう援助するのか”と問われても、ひと言で語ることが難しい職業でもある。（答えは心理学がご専門の学者にお任せしたい。）職務について今年で25年ほどになるが、その間、精神科臨床に始まり、現在も生殖医療の臨床現場、開業カウンセリングルームで多くのクライアントと出会う。悩みを抱えるクライアントに向き合う日々が、いつしか筆者の日常となっている。

心理の実務家とは別に、筆者には研究者という別の側面がある。当事者の心理支援、「家族形成に課題を抱える当事者・カップルの援助を考える研究」に共通のテーマは「家族」である。いずれも当事者の悩み・苦しみ、その意志やニーズの理解から、そこにある課題・問題の解決をクライアントと共に目指している。それは、社会的、法的、心理的、対人関係性における課題・問題であり、その解決は時に容易ではない。一方で、個別の思考・認知・行動の変容から、また対人関係においてはその関係性の変化から、解

決へと向かうことがある。その分岐点に心理カウンセラーの視点や判断が活かされる。心理職、研究者の両側面は、当事者を援助する者として欠かせない要素であり、「語るリスク」を持つ当事者にとって、「語ることの意味」を付加できる二足のわらじと捉えている。

注意すべきこと

心理支援で気をつけなければならないのは、病院臨床で伺った話は、カウンセラーに守秘義務があるため口外できず、また、研究の一環としてヒアリング調査、インタビューにご協力いただいた方々から伺った内容も、ご本人の承諾無しに口外することも、文章にすることもできないことである。ただし、“私が知ったこと”は誰にも伝えることができないけれど、“援助を必要とする人たちがいる”ことを伝えることはできる。「語ることのリスク」に怯えつつ、支援の必要性を訴える当事者にとっての「援助者」である/となるために、“自分はどうかあればよいのか”を共に考えることも可能である。ただし、援助者であるためには、まずは当事者を理解することから始めるべきであろう。

当事者が何を語り、何に悩み苦しみ、誰とどういう暮らしをしているのか。誰がどう生計を立て、人生を設計しているのか。パートナーとの関係、原家族との関係、職場や近隣との関係性はどうか、「子どもを持つ/持たない」など家族計画に不具合は生じていないか、など当事者理解のための情報は、対人援助に直結するものばかりであり、同時に、家族援助、家族形成のための支援にも共通する。これらを、問いたただすのではなく、詰問するのではなく、その方の思考と語りに添いつつ、丁重にご提示いただくという姿勢で傾聴することを心がけている。

援助者の多くには、聴く力が備わっている。語ることにリスクを生じさせない“ラポールを築くスキル”を習得している持つ者も少なくない。これらは、セクシュアルマイノリティと称されるLGBTQの支援者(=アライ)になるための資源となりうる。その資源を活かし、積極的にアライであることを表明することから、セクシュアルマイノリティ当事者の援助が始まることが期待できる。

残念ながら、誰に相談すればよいか、自分たちの存在をどれだけ知っているか、果たして、LGBTQ(あるいはSOGI)の意味を援助職がどれだけ理解しているかを知る当事者は少ない。対して、対人援助に従事する専門職であっても、セクシュアルマイノリティ当事者の理解に、最低限必要な情報を習得している援助者も多くはない。この現状に一石を投じることが、今の筆者にとっての課題となっている。

自戒を込めて

以前務めた精神科医療施設では、多様な悩み苦しみを抱える多くのクライアントに出会った。(以前、連載のどこかで触れたこともあるが)そこで出会ったあるクライアントの語り、いま、心理の実務家、そして研究者である筆者の問題意識に結びついていることを、今更ながら懐かしくも不思議に思う。

かつて精神疾患の分類にカテゴリーされていた「性同一障害」という疾患が、現在では「性別違和」という名称に代わり、精神疾患から除外された。国際基準で、精神疾患ではない、とカテゴリーされたのである。援助者は、その前提で当事者と向き合い、支援の必要がある。この情報は、援助者のみならず、医療者にさえも、さらには介護福祉現場にも浸透しているとはいえない国内の現状がある。セクシュアルマイノリティ支援の必要性の周知がない現状では、当然、従来の間違った理解が訂正されることなく、今でも社会一般の常識として定着し続けている。怪我や病で病院を受診しても、障がい・疾病があり福祉サービスが必要であっても、医療・福祉それぞれの現場で、何かしら不自由なおもいをしたり、傷つくことがあるとの声を頻繁に耳にする。当事者をどう理解すればよいのか分からない状態で、援助することの危険性を象徴するエピソードだと感じている。当事者に関心を寄せ、彼らが発信する情報を確実に受け取り、その声に耳を傾けることから理解は始まる。そこが援助のスタート地点なのである。



当事者の活動に積極的に関わり、そこに自ら足を運び、アライであることを行動で示す。言葉を交わし、メール Address を交換する。イベント情報を提供していただき、友人知人を伴い参加する。気持ちだけでなく、行動を伴う援助者でありたいと、常日頃思う日々でもある。

次号では、筆者の活動を承知した上で、自らに起きた出来事、困りごと、相談や人間関係・家族関係の悩みや問題・課題を語る当事者から得た学びを資源に、セクシュアルマイノリティの方々の援助者であるため/になるためにどうすればよいのか、また何ができるかを皆さんと共に考えたい。